
モンスターハンター馬鹿が行く異世界はモンスターハンターに似た世界でなければならない

トリィケンスケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター馬鹿が行く異世界はモンスターハンターに似た世界でなければならない

【Nコード】

N0374V

【作者名】

トリイケンスケ

【あらすじ】

モンハン大好きな主人公！！

タイトル通りモンハンの世界に。

邪心はないけど、天生の誑しでハーレムを築く??

さあがんばるぜ！！

注：ハーレム・チート・主人公最高・作者の妄想・等々、が含まれます。

女神様と遭遇（前書き）

ども、トリイです。

異世界へと同時進行でやります。

どうぞよろしくお願いします。

よし、話をしようじゃないですか、会話を！
それは少し前のことだった……

8分前

「おはよう起きた〜」

何なんだこのフレンドリーなお姉さんは。

「えっ、ああ、まあ、はい」

これは・・・動揺したんだ、動揺したんだよ！！うん！！「汗」
決ツツして相手が綺麗とかそ、そんな訳じゃない！！「目を逸らす」

「まっ、聞いてね、説明するからね！」

言葉の最後に付けられたウインクがキレイだった。

しかし、如何に相手がキレイだからといっても表情や態度を変える
のは僕のポリシーに関わる。

………出来るかどうかは別にして。

「で、なんですか？」

今回は表情にも態度にも出なかった。

「モンハンに似た世界に行ってもらおうかと思って！！」

お姉さんの背景に星の光のようなものが現れている。

「そうですか」

心の中の動揺を隠そうと意識して無表情を作った。

それが彼女には面白くなかったようで、不機嫌そうな顔になった。

「驚かないんだね。まあいいや、そんなわけで7つの特典を、あげ

るよ。

1つ目に、身体能力。

2つ目に、運。

3つ目に、金、欲しい時に欲しいだけ出るから。

4つ目に、ハーレム能力、君に気がある人は、君と居ると心が落ち着くから。

5つ目に、技、匠の技を覚えるよ。

6つ目に、適度な道具。

7つ目に、装備、武器6つ、防具3つ、後、何か作ってあげる。あつ！チート付くから。

なにがいい？」

すごいな。ハーレムって何時使うのかな？。

いかん、いかん、どの装備にするか、ちゃんと考えないと。

あと一つ言いたい、かなり驚いたぞ。

「え〜じゃあ。武器は、ブリュンヒルデ・番傘【斬雨】・天上天下
天地無双刀・双龍剣【大極】・蒼穹双刃・阿武祖龍弩。防具は、ド
ラゴンXシリーズ・シルバーソルGシリーズ・ミラーツZシリ
ーズ。作るのは防具でそうだな〜着物みたいなのに、銀陣羽織を羽
織った服みたいな、いっぱいスキルあるもの。お願いできますか？」
いいかな〜、多すぎるかもしれないが。

「いいよ「即断」」

いいのか。

まあ、本人が言うんだからいいんだろ。

現在へ

「じゃ、行つてらっしゃーい「笑」」

りょーかい！

「行つてきます「笑」」

女神様に微笑み返し！

「ドン！！！！！！！！！！」

無駄な効果音を響かせて、穴が開いた。

もちろん、落ちた。

次回

異世界に行く主人公。
どうなることやら。

乞うご期待。

女神様と遭遇（後書き）

感想待ってます!!!!

異世界の家に現る人影は？・・・・・・・・（前書き）

どーも

ご無沙汰です。

異世界の家に現る人影は？…………

銀亜目線

みんなー、俺だよ銀亜だよ。

テンションを上げて、密林にある異世界の家にいます。

何でテンションがすごいことになっているかと言つと。

驚かないでくださいね。

……………

美少女2人がリビングに倒れてます！

ふははははは……………いや、知りません。

知らない子です、ナンパもしてなし、それ以前にしたことがないし。
しかも、この子達は、ハンターなんですね。

防具着てるし、太刀とボウガンもってるし。

……………一人で漫才しているようになってしまった。

うん、おふざけタイム中止。

これは戦闘後だな。

防具は引つかき傷だらけ、軽く焦げてる。

そして防具は、剣士のほうがボロスシリーズ、ガンナーはウルクシ

リーズ。

とどめに少し呼吸が荒いな、毒受けてんじゃねえか？

これは解毒薬じゃなくて、げどく草使つて毒抜けなかったか。

っーことは、解毒薬を使い切ったか、持ってないか。

持っていないのは、狩に行くには不意だな、

つまりは、使い切った上に食らったか。

つまりだ。

密林に居て、この防具を持つレベルの人をボロボロにできて、しかも毒を持っている。

.....

リオレイアかなー。

そうだよね、たぶん。

え？なんでいきなりそんな博識になってるかって？

それは、この家にあった本を読んだ。

まあ、いいや。

とりあえず、毒を消すか。

えっと、こうして、ここをこうして、ここからここまでをこうして、完了！

次は防具を脱がそう。

え？違う違う、傷の手当てだよ！邪心はない！！

えっと消毒して、薬を塗って、包帯を巻く、完了！

あゝとゝはゝ、ベットに運ぶつと。
だゝかゝら！！邪心はない！！！！

さて、目が覚めるまで待つか。

一時間後

「うううん」

おお、目が覚めたぞ。

しかし、まだ完全には覚醒してないようだ。
頭を振っている。

「お目覚めかい？お嬢さん」

俺のことを認識していないようなので声を掛ける。
まあ、そしたら気が付くしね。

「だっ誰！！」

Oh、敵意バリバリ。

かけていた布団を自分の前面を隠した。
服着ているのに。

「んゝ、この家の主かな」
嘘じゃないし。

そう言うとなぜかびっくりした顔になった。
そんなに悪人の顔をしていますか？俺。

「そ、そうなのですか」

うんうん、そのとおり。

「で、お嬢さんはなんて名前なの？」

円滑なコミュニケーションをするためには聞くべきだと思ったから聞いた。

「は、はい。私は、シリナ・レンナートで。

こっちの子は、幼馴染で、一緒に住んでて、パーティーを組んでる、ラミル・シンラートです」

ふむふむ。ガンナーのシリナに剣士のラミルね、うんうん覚えた。じゃ、次は。

「何で俺の家に居るの？」

先ほど推理したとはいえ、確定ではない。

やっぱり聞くべきだと思う。

「えっと・・・それは・・・」

言いにくそうだ。

ならば、俺の推理を言う

「リオレイアに、やられたのかい？」

目を見開き、驚いてる。

やはり推理は当たっていた。

「なっ、何でそのことを・・・」

隠したいなら、そんな表情はしないほうがいいね。

「君らの状況を見て、普通に推測したんだ」

まあ、俺もできると思わなかったが。

そう言うと、覚悟を決めたような顔になり。

「その通りです」

そう告げた。

やっぱりな。

1時間と少し前・シリナ視点

「やられた……」

リオレイアと戦ったけど負けた。

圧倒的だった、突進やブレス、サマーソルトなど、
どれをとっても強かった。

「大丈夫か？」

ラミルちゃんも心配してくれているが、
結構な傷がある。

毒も解毒したかと思っただけど、無理だった。
おかげでくらくらするし、熱もあるみたい。

「あつ、あそこに家がある！」

家を見つけました、休ませてもらうう！

そう思い、家に近付いた。

「すいませーん」

ドアを開け、中を見渡す。

誰か居るだ……ろ……う……か。

「ドサ」

目・・・かすんで・・・・・・・・意識が・・・・・・・・

「おいおい誰だ？」

1時間後

「うううん」

ゆっくりと目を開けると、自分がやわらかい感触に包まれているのが分かった。

ここは？ベット？

「お目覚めかい？お嬢さん」

声の方向を見てみると、だれかいた。思わず叫んでしまった。

「だっ誰!!」

男の人は誰でしょう。

若干落ち込んだように見えたけど。

「んゝ、この家の主かな」

え！そうなのですか？驚きました！

銀亜目線

「なるほど、なるほど」

うん、説明を要約すると。

- 1つ、この子らは近くのレージ村から来た。
- 2つ、リオレイアだけでなくリオレウスも居る。
- 3つ、このままじゃ商団は来ないから飢え死に、村も危ない。
- 4つ、でも、倒せるハンター来ない。
- 5つ、片方ずつ狩ろうと思った。
- 6つ、だけど返り討ち。
- 7つ、どうしよう。

「どうでしょう……」

めっさ落ちコンドル。

ダジャレ言てる場合じゃないな。

「俺がやるつか？」

実は俺、この世界のハンターカード持ってる。

判断基準違っけど。

ゲームだとハンターランクは数字だったけど、こっちではアルファベットだ。

G<F<E<D<C<B<A<A A<S<S S<E A<E S<E Xだから、スゴイという意味のG級はなく、SSまでは、その階級のアルファベットと同じ段数の依頼階級がある。

俺は、SSだな

「えっと、失礼ですが、ハンターランクは？」
うん、言うだろうと思った。

俺はポケットの中のカードを取り出す。

「あゝハイ」

確認しろ、と言わんばかりに投げ渡す。
危なげに彼女はカードを受け取った。

「じゃあ、拝見します」

驚くだろうなと、思っていると。

「え〜と、て！SSじゃないですか！！！」

驚いた顔をして、彼女は大声を出した。

まったく！ラミルちゃんが起きるでしょうが。

「なんじゃ？SS？」

起きてしまったか。

「やあ、おはよう」

挨拶は大事だ。

第一印象は、大事だろう。

「あ、おはようございます
しゃべり方変だな。
あまり気にしないが。」

「あつ、ラミルちゃん！この人は、ここの家の持ち主で、私たちを
助けてくれた、えっと・・・」
おっと、名前言ってなかったか。

「銀亜 翔だ。」
そう言った。

「ギンアさんです！」
しかし、声が大きいな。

「そうでござったか、それはかたじけのうございます」
うーん、二人ともよく見ると、可愛いな。

「で、SSとは何がじゃ？シリナ？」
いろいろな事があり、本題から外れていたな。

「そうだった！驚かないでねラミルちゃん。
このギンアさんは、SSランクハンターなんだよ！」
胸はるところじゃないと思うが。

「な、なんと！」
驚く、ラミルちゃん。

そうそう、SSってたぶん正しい実力じゃあないな。
だって、あの装備だからな、もっと強い。

「しっ、しかしだシリナ。どうやって報酬を払うのじゃ。
無報酬はいかんぞ、ハンターとしてな」
へへ。プライド高いんだな、ハンター。

「どうしよう、ラミルちゃん！」
しかし、今気が付いたのか。

「うむどうするか」
腕を組みながら考えている二人。

「うへん」
ん？ちらちらこっちを見てきているな。

「うむ」
何でこっち見ているんだ？
何が良いかを決めろって事か？

「どしよ」
考えている声を出しながら、こちらを見てくる。

「どうするか」
二人とも、もしかして何も考えてないだろ。

決めればいいのか？
うん、そうみたいだね。
決めればいいんだろう。

「私たちにできることなら何でもするんだけど」
こんな態度だし。

「そうじゃのう」

同意しているみたいだしな。

あゝあ。じゃあやって貰おうか。

「じゃあ報酬だけど」

何とか報酬を考える。

「「はい」」

嬉しそうだな。

やはり自分の村を助けたいんだな。

「金是要らん。お前らの家に住ませてくれ」
驚いてる、驚いてる。

いや、ココ退屈なんだよ。

「「えつ、そんなことで良いんですか？」」
やっぱりね、男と一つ屋根の下つてのは……って！いいのかよ！

「いいんだ……」

「「ハイ！」」

いやー、笑顔が可愛いね。

「じゃ、さくつと狩るか」
さっさと狩りたい。

「「……」」

えっなに？何で固まってんの？

「えつと、そんな、ふらつと行くんですか？」
え？

「何かおかしいかい？」
なんだ？なんだ？何かおかしいのか？

「そんなに簡単に倒せるのかの？」
何だそんなことか。

「え？雑魚だろ？普通のリオ夫妻なんて」
ええゝって顔してんな。
普通の人間からしてみれば、異常か。

「そ、それなら、狩りを見せてください！」
シリナちゃん、興味津々と言ったような顔だ。

「いいよ」
別に隠す事じゃないし。

えゝと、神様に貰った防具にゝ天上天下天地無双刀で行くか。

「すみませぬが、その剣、天上天下天地無双刀ではございませぬか？」
？

ラミルちゃんが聞いてきた。
あゝそーういや幻の剣だったつけ。

「そーだよ」
なんか行きたそーな顔をしている

「一緒に行くかい？」

と、笑顔で聞いてみた。

「ッ／＼／いいのか？」
顔、赤いな」

「いいよ、いいよ」
よし行くか。

「じゃ、行くぞ。怪我するなよ、俺が困る」
笑顔で問いかける。

「ハイ／＼／」

次回

このクソ誑しの狩りはどうなる？
乞うご期待。

異世界の家に現る人影は？・・・・・・・・（後書き）

感想待ってます。

リオレイアアアア！！シネエエエエエ！！（前書き）

僕もう一つ小説かいてます。

リオレイアアアア！！シネエエエエエ！！

銀壺視点

「よし！リオレイアから行くか！」

何でかっと言うとだな、
なんとなくだ！

「えっ？道具なしですか？」

シリナが驚いてるけど、なんかおかしいか？
そもそも攻撃なんて、食らわなきゃ良いんだ。

「おかしくねえだろ？」

おっと、お前らは、がけの上で見てろよ」

怪我されたら、たまらないからな。

「う、うむ」

よし行くか。

この防具のスキル、自動マーキング。

そうそう、このフィールドって、2Gなんだよね。
で、森丘のエリア5にリオレウス、9にリオレイア。

「んじあ、エリア9だ。」

「「はい」「」

ラミル視点

「「はい」「」

目の前に居る銀亜殿は、
あの天上天下天地無双刀を持ち、
リオレイアとリオレウスを雑魚と言い切った。

そして・・・そのお・・・か、か、かつこいいのだ／／／／
あの銀色の髪、銀色の目、透き通る声、
す、す、す、好きになったのじゃ／／／／

「おい！ラミル！大丈夫か？」

ああ、その声が愛おしい、
なんだか落ち着くのだ。

「あ、ああ、大丈夫だ」

ああ、もう少しであの方の狩が見れる。

「よし、じゃあがけの上に居てな」

「「はい、じゃあ後で」」

「ああ」

さあ狩りの始まりだ。

シリナ視点

さあ狩が見れます、
どんなものでしょう。

「よっこいしょ」

がけの上にきました、
さあ狩りを見せて下さい！

あ！銀亜さんが走りだしました。

銀亜視点

「はっ」

走り出す俺。

まずは、飛ばさないように、

皮膜を切る。

「おおお！！！」

上段から一撃、

切り上げ、

持ち直してからの上段切り。

よし、ズタズタになったな。

ん？恐怖はないのか？

そんなモン感じる暇ねえよ。

「ふっ！」

咆哮している隙に、

全身に気合を入れ、

翼を折る！

「鬼刃切り！！！」

『鬼刃切り』これは俺が考えた切り方。

理性のリミッターをギリギリまで外し、

気合を剣先まで入れ、

切る切る切る！！

「バキイイイン」

よし折れた、

それを確認すると同時に、気合を抜く。

「らあ！！！」

さらに切る、
切る切る切る！！

グオオオオオオオオ

「怯んだアアアアア！」

怯んだと感じると共に、
気合を溜める。

「オラァアアアア！！！」

上段からのオオオオオオオ

「断絶剣ダアアアアアアアアアア！！！」

「ズブシャアアアアアア」

ガ
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
・
ア
・
・
・
ア
・
・
・
・
ア
・
・
・
・
・
・

「ズシィィィィィィィン」

「終わつたな」

「銀亞さん」

「よお、終わつたぜ」

「すごいです!」

うん、シリナちゃん、
胸が当たってる。

これ限りなく服に近いから、
感触が直に来る。

「さすがでござる」

うん、貴方もだラミル、
胸当たってる。

「よし次だ、次」

20分後

「ラアアアアア」

グオオオオオツオ・オ・オ・オ・オ・オ・オ・オ・オ
「ズシイイイイイイイイン」

作者：普通に書いても圧倒していて、
つまらないので、
飛ばしました。

「よし終わり」

「銀亜さ〜ん」

「終わったぞ」

「ありがとうございます」

二人とも、胸当たてる！

「よし家に帰ろう」

「はい」

次回

村に行くことになった銀亜の運命は？
乞うご期待。

リオレイアアアア！！シネエエエエエ！！（後書き）

感想待ってます。

あゝもう一人いるんだ。ふうん、帰ってきてないんだ。……エエエ

もう一つ書こうかな。

あゝもう一人いるんだ。ふうん、帰ってきてないんだ。……………エエエ

—————銀亜視点—————

ハハッハッハッハ。

チートよろしくの力で（実際チートです）
リオ夫妻をぶち殺した、
人の形をしたモンスター事、

銀亜 翔だよ。

いやー 弱 かつ た Z E 。

今、家に帰って詳しく
シリナちゃんとラミルちゃんのことを、
話してもらってる。

「へーラミルちゃんとシリナちゃんは、
同じ家に住んでて、
同じパーティーなのだけではなく、
両親がパーティー組んでたんだ」

そりゃ仲が良さそうな訳だ。

「はい もう一人居ますけど」「ギュッ」

へへもう一人居んのかへ。

そして腕に胸当てんの止めろ、俺の理性がオーバーヒートだ。

「名前なんていうの？」

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ、俺の脳！腕の感覚を遮断しろおおおおお！！！！！！

「ティノル・ペイニードでござるよ 翔殿」「ギュッ」

ティノル・ペイニード、ティノル・ペイニード………。
(その後ティノル・ペイニードを唱えに唱える)

いかん無心になるために唱えてたら、

ゲシユタルト崩壊してきた。

グウウウウ！！！！オレノリセイガアアアアアアア！！！！！！！！

「へ、へへへへ」「ガクガクガク」

俺の中の獣！！抑えろ！！！！

く、くそ！！持ちこたえられないだとおおおお！！！！

く、第一種戦闘配備！！！！

敵は核弾頭により、理性の牢獄を攻撃中！！！！！！
現状からの回避をされたし！！！！！！

「あ、あのさへ」「グググググ」

もう少し持ちこたえてくれ!!!

「ハイ?」「ギュツ」

本能の獣【ガアアアアアアアアアア】

理性部隊隊長【ちiiiiiiiiiiiiii】

本能の獣【グガアアアアアアアアアア】

理性部隊隊員4【た、隊長!!!も、もう・・・ぐわあああああ】

本能の獣【グギギギギギ】

理性部隊隊長&1～3、5～7【ウルズ4!!!】

本能の獣【オオオオオオオオオオオオ】

理性部隊5～7【うわわあああああ】

理性部隊隊長【ウルズ5!!!ウルズ6!!!ウルズ7!!!くそお!!!
!俺に力が無いから!!!!】

本能の獣【オガアアアアアアアア】

理性部隊1～3【隊長!!!に・・・げ・・・て・・・】

本能の獣【アアアアアアアアアアアアアアアア】

理性部隊隊長【皆アアアアアアアアアア!!!!!】

俺：くそおおおおおもうムリイイイイ。

「どうしたんですか！？銀亜さん！」「ギュッ」

この場から離れなければ！！！！！！

「あのさーおなか空いてない？」「がくがくがくがく」

「うゝむ、空いております」「ギュッ」

よ、よし！そうかそうか。

なら食おう、すぐ食おう！！

「よし！じゃあつくりますか！！」

よし離れた！！

「「あ、私も」「

NOー！！！！！！

それは繰り返しにスギナイズE。

「いいや！！俺が作るよ！！！」

これ絶対！！決定！！！！それがいい！！！！！！

「「じ、じゃあ」「

よっしやああああああああ！！！！！！！！！！

「じゃ、テーブルに座ってて」

そして台所に歩いていく。

次回

村に行くことになる、銀亜の運命は？
乞うご期待！！

あゝもう一人いるんだ。ふうん、帰ってきてないんだ。……………エエエエ

はい、直しました。

感想くれるとうれしいです。

あゝもう一人いるんだ。ふうん、帰ってきてないんだ。……………エエエエ

さあ!!

前はタイトルとお話がぜんぜん噛み合わないお話でしたが、今回は大丈夫だと思いたい!!!!!!

今回は村に行くお話と、主人公がドンだけチートなのか、と言うお話の準備段階のお話です。

うるさいなあ。

理性部隊隊長「頑張ったんですけど……！！！！何でこんな対応……！！！！」

良いじゃん別に。

理性部隊隊長【良くない！！良くない！！！！】

うるさいなあ、じゃバイバイ。

理性部隊隊長【ちよっ！！聞いてる！！！！？？？もしも――――！！！！】

作者【うるさい黙れ、先に進めない】
作者が隊長を消し飛ばした!!!

理性部隊隊長【アツ……………】

ふう、さて！飯を作るか。

――今日のメニュー――覧――

なぜか家の後ろにあった畑から取れたとうもろこし入りのスープ。

同じくあつた米から作ったご飯。

同じくあつた野菜から作つたサラダ。

この前釣ったサシミウオとハリマグロの刺身。（醤油は作った）
はじけいわしのから揚げ。

作者【あゝ美味そう】

とりあえずは二人を呼んで、食卓へ行くか。

「おい、できたぞー」
二人に聞こえるように叫ぶ。

「「ハイ」」
二人の声が聞こえたので、食卓に食べ物をならべる。

「この世界の常識について聞いておくか」
実は、詳しくは知らないんだよね〜。

「よし、席に着いたな？」
いただきます！！」

「「いただきます！！」」

次回

次はこの世界の常識について語られる！！！！
乞うご期待！！！！！！！！！！

作者【今回も、村いけなかった】
落胆

あゝもう一人いるんだ。ふうん、帰ってきてないんだ。……………エエエエ

今回も準備段階ルルル。

あゝもう一人いるんだ。ふうん、帰ってきてないんだ。……………エエエ

—————銀亜目線—————

どうも皆さん、銀亜翔です。

最近気が付いたんですけど、俺って何に向かって喋っているんでしょうね。

まあ、いいです。

今、シリナちゃんとラミルちゃんにこの世界の常識について聞いていた。
しかし途中からおかしな方向に流れていった。

「ですから！こうなっているのにこうなので！銀亜さんは異常なんです！」

へーそうなんだ、道理であんなに驚いてた訳だ。「棒読み」

「分かっておられるのですか！？貴方は一般人はもちろん、ハンタ

「でも逸脱した力を持っているのですよ！聞いてるんですか！！」

あゝあゝ、聞いている聞いてる、聞ーいーてーるーよゝゝ」「心の中なのに、棒読み」

「銀亜さん！！」

如何してこうなったのかな！。

常識は、男女混浴が近親者では、ある程度当たり前で、ハンターの依頼受注制度に少し変更がある程度だったんだが………。

「「わかってるんですか！！？」」

二人が言うにはモンスターはもっと時間を掛けて、それこそ数日掛けて狩るものだったらしい。

今まで、少し色んなことが起こり気に入らなかったが、常識について話すうちに気が付いてきたらしい。

まあ、俺の身体能力やら動体視力やら色んなものが気持ち悪いくらいになっている。

リオレイアの筋肉の動きを鱗の上から見て次にどう動けるか分かるとか、リオレウスの翼の周りにある風の動きを10メートル以上離れた所から見て次に何処からどう動くか分かるとか、鱗の何処がどう脆く斬れ易いか分かるとか、筋肉や骨格から何処に心臓や臓器があるか分かるとか。

ね、気持ち悪いだろ。

で！今居るのは竜車の上だ。

一応クエストの受注は伝書鳩で街に受注したらしいので、レージ村ではなくここらでは一番でかい“シクスロード”に行くらしい。

そうそう、此処では引継ぎクエストがあるらしい。

これはクエストに失敗した時に他のハンターに頼み、報酬を上乗せして依頼を引き継ぐものだ。

両者の合意の上であれば、ギルドを通さなくていいらしい。

じゃあ、行こうか。

次回

乞うご期待。

あゝもう一人いるんだ。ふうん、帰ってきてないんだ。……………エエエ

今回は予告なしです。

あゝもう一人いるんだ。ふうん、帰ってきてないんだ。……………エエエエ

今日はようやく町です。

あゝもう一人いるんだ。ふうん、帰ってきてないんだ。……エエエ

―――銀亜目線―――

「へ、意外とでかいんだな」

そう思ったよホントに。

もっと小さいと思ってたんだけどね。

「そうですよね」

「ホントにのう」

シクスロードってスゴイでかいんだな。

やっぱり、石の床だけだね。

家は石を切りだして、積み上げてる感じですね。

家の大きさは、現代と同じぐらいだね、2階建てだけだね。

「こっちです銀亜さん」

「こつちですよ」

もつと奥の方に、ギルドがあるようだ。

っていうか、上り坂になってんな、メンドクサイな。

「で、もう少し?」

ちなみに俺は今、神に貰った防具に、ブリュンヒルデ・番傘【斬雨】
・天上天下天地無双刀・阿武祖龍弩を持っている。

そういえば、神に貰った防具って言い方めんどくさいんで正式に名前付けよう。

うゝゝゝん、そゝだゝなゝゝ。

銀龍烈将【神死】でいいか。

「いいえ、まだまだですよ」

「この道を真っ直ぐですけどね」

えゝゝゝゝゝメンドクせえ。
一気にいくか。

「えっ!?! 銀亜さん!?!」

「ちよっ!」

「ちょっとだまって」

何時になるか分からないから早く行くために、二人を抱える。

「よい、ドーン」

ダン!!

「「キヤアアアアアアアア……」

「」

ダッダッダッダッダッダッダッダッダッダッ

「早い！早いです！」

「もう少し！遅く！っ！」

「喋るな！舌噛むぞ！」

ダッダッダッダッダッダッダッダッダッダッ

自動車並みの速さで走る。

「銀亜さん人がたくさんいます！止まって！！」

「そうですよ！！」

ふっ、そんなこと、このチートボディには

「関係ない！！」

そう言う俺は横にあった家の壁を垂直に駆け上がり、屋上伝いに走る。

ダッダッダッダーンダッダッダーンダッダッダッダーン

「「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアア」」

ん？もう少しで家がなくなるな。

「ぎ、銀亜さん！！」

「銀亜殿！！」

ギルドまでもう少しか、よし。

「オラッ! !」

ダッダ! ダン! ! ! ! ! ! !

ヒュウウウウウウウウウウウユウウウウウウウウウ

ダアアアアアン! ! ! ! ! ! ! ! !

ざわざわざわざわざわざわざわざわざわざわ

「ふ、俺は鳥になれたみたいだな」

うん、気持ち良かったね。

「銀一亜一さーん」

「銀亜殿?」

あーそうだったね。

「銀亜殿どうなのですか？」

ふ、跳ばないよ。

「飛ぶんだよ」

ダアアアン！！！！

「同じじゃないですか！！」

トン

「さ、降りろ」

此处で良いだろ。

「「は、はい」」

あれっ、なんか静かだな。

そう思い、振り返ると

皆さん、口を大きく開けていた。

「まあ良いや、ほら、二人とも報告しなきや」

「「あ、はい」「」

まだ皆さんこちらを見ている。

「どづかししました?」「」

乞つこ期待。

あゝもう一人いるんだ。ふうん、帰ってきてないんだ。……………エエエエ

質問等感想までお願いします。

あゝもう一人いるんだ。ふうん、帰ってきてないんだ。……………エエエ

—————銀亜視点—————

「「「「「「「スゲエエエエエエエエエエ」」」」」」」

「五月蠅いなあ、何だよ」

ほんとに五月蠅い。

何これ、音波兵器並に五月蠅いな。

音波兵器が五月蠅いかどうかは知らないけど。

この位叫べれば、モンスターの怒号バウンドボイスに匹敵するじゃん。

……………そうでもないか。

「五月蠅いのお何の騒ぎじゃー!」

誰だあの爺さん、耳長いな、背が低いな。

しかしだ、俺の責任ともいえるこの騒ぎ、誤っておいた方が良くかもしれない。

「スマン、爺さん。この騒ぎの原因は俺だ」

そう言いながら手を挙げる。

「ほう」

爺さんは軽快な走りで俺の所まで来る。

「お主見ない顔だのお」

まあ、それはそのとうりだ。

なんせ、世界が違うからな。

「まあな、他の大陸でハンターやってたから、知らなくても仕方ないだろ」

そう言うつと、爺さんは納得したような顔になり、俺を見た。

「そうかのお、まあええわい。で、何の用だ？」

誤魔化せたのかな？怪しいところだ。

「ああ、その二人の狩猟を引き継いだんで、その報告だ」

そう言うつと爺さんは考えるような顔をした。

「ん？とするとー、レージ村に出たりオレウスとリオレイアの同時狩猟かの？」

ん、そんなことが。

「そうだが……………どうかしたのか？」

何か不都合があつたのだろうか？

知らない訳ではないみたいだけど。

「依頼の申し込みと狩猟の申請を持った伝書バトは着たが、まだ二日もたつとらんぞ？最低でもあの二頭なら、五日がいいところなんじゃが」

「ああ、そんな事か。一時間そこで倒したぞ」

しーん。

まるで、そんな言葉が当てはまるように、静かだった。

「ほ、本当にか？」

「ああ、嘘だと思うならその二人に聞けばいいし、それ以前に嘘を言う利点なんてないね。それに爺さんだって言つたろ？二日もたつてないって」

そう言った瞬間に4人のハンターが入ってきた。

えゝと先頭から。

一番目にバギィシリーズの大剣。

二番目にネブラシリーズの片手剣。

三番目にインゴットシリーズのガンナー。

四番目にハプルシリーズの双剣。

依頼が終わった後みたいだな。

そう思っていると、バギィシリーズの奴が二人に近寄りこつ言った。

「こんにちは、二人とも。僕の妻になる決心は付いたかい？」

……はい？

「なるわけないでしょう、前にも言いました」

「その話はお断り申し上げたはずだ」

……え？

「ふっ、そう嘘を付かなくてもいいよ。君たちと僕は結ばれる関係にあるんだから」

うん、何が起こってんのか分からないけど、ただ言えることがある。

お前キモいよ。

避けられてるよ。

自覚しろよ。

そんな訳だから

「なあ、お前何やってんだ、嫌がってんだろ」

そうやってしまったのも仕方ないと思うんだ。

次回

この男は何者なのか？

この男の目的とは？

次回は主人公のチートが炸裂するかも。

乞うご期待

あゝもう一人いるんだ。ふうん、帰ってきてないんだ。……エエエ

感想待ってます。

あゝもう一人いるんだ。ふうん、帰ってきてないんだ。……エエエ

――――銀亜視点――――

「なあ、お前何やってんだ、嫌がってんだろ」

言ってしまった。

「うん？、君は誰だ？そして僕の妻たちのなんだ？」

うわ、やっぱりうぜえ。

こいつは、自分の状況理解してんのか？嫌がられてんのが分からないのか？

お前の妻じゃねえだろ二人とも、嫌がられてるのを自覚しろよ。

「お前気が付いてないのか？嫌がってんだろ二人とも」

俺がそう言つと、そいつは俺を馬鹿にしたような顔をして、こう言つた。

「なんだい君は？これは彼女らの愛情表現に決まっているだろ」

うわゝ、ウツツツツゼエ。

「なんだ、やっぱり気が付いてないのかお前、その二人の行動がお前への愛情表現だとしたら、この世は愛情で満ち溢れてるな」

「何を言っているのか分からないな。君は何が言いたいんだい？」

こいつ、こっちがオブラートに包んでやってんのに気付けよ。

「まあ、単刀直入に言うとな、その二人は嫌がってんだから、離れろってことだよ馬鹿」

そう言うと、馬鹿は火を真っ赤にして、こう言った。

「貴様この僕を馬鹿だと！！？離れろだと！！？何様のつもりだ！！」

カッッチーン。

「テメエこそ何様だ。本人の意思も聞かないで、勝手に妻だの愛情表現だの言ってるじゃねえよ。お前みたいな自分の妄想を他人に押し付けるような奴は人間やめちまえ」

「なんだと！！？僕みたいな優秀なハンターに人間やめちまえだと！！？」

「悪いな、お前のことなんて知らないよ、サル」

「サルだと！！？貴様この僕を“獣殺し”のレイスティン・ハルバートを侮辱する気か！！？」

「あ！？サルが同属殺して得た称号、自慢してんじゃねえよ！」

「ぐうう！！貴様表に出ろ！！僕を侮辱したことを後悔させてやる！！！」

「ああいいぜ！俺が勝つたら二人の半径25メートルに入るなよ！！！」

「僕が負けるなんて考えられないが、いいだろう！ただし！！お前が負けたら僕の奴隷にしてやるからな！！いいだろう！！？」

そうして俺らはギルドの外に出た。

そういえば、口論しているときにアイツの仲間は何も言ってこなか

ったな。

人望ないのかアイツ。

「勝負形式は武器なしでの喧嘩だ！参りましたと言うか、気絶したら負け！わかったか？」

よしそれなら俺のほうが有利だな。

そう思い俺は首を縦に振る。

「降参したり、命乞いをするなら今だぞ、痛い目見たくないならそうするんだな」

お前、俺が負ける前提で話してるだろ、まあいいやどうせ俺が勝つ。そう思っていると、ギルドから受付の人が出て来て俺のところに来た。

「ねえアナタ、大丈夫なの？アイツは大剣使いよ。喧嘩なんてアイツの方が有利じゃない」

受付さん、“アイツ”って言うていいのか？

「心配してくれてんだ、ありがとう。でも大丈夫だよ、勝つから」

そう言つと受付さんは、若干顔を赤くしてこう言った。

「そ、そう。ならいいんだけど」

あっそうだ、これ聞いところ。

「ねえ、受付さん。アイツの武器とか防具とか壊したらマズイかな？」

そう言つと受付さんは怒った顔になり。

「受付さんじゃなくてミラ。私の名前はミラ・リントンよ」

あっそうなの、ごめんなさい。

「別に気にしなくてもいいと思うわよ。喧嘩にしたのは、アイツなんだから」

よし、なら大丈夫だ。

「ありがとう」

「どういたしまして、じゃあ頑張つてね」

そういつとミラさんは人ごみに帰っていった。

「もういいか!?!」

おっと、こいつのこと忘れてた。

「ああ、もういいぜ」

「じゃあ、いくぞ!」

そういつとサルは突進してきた。

それを俺は

「オラア!!!!!!!!!!」

4分の1ぐらいの力でぶん殴った。

「ギヤアアアア!!!!!!!!!!」

サルは痛みで暴れてる。

あれ？頭蓋骨陥没ぐらいしてもいいのにな？

「ぐうう！キサマア！！」

予想道理サルは大剣を持って突っ込んできた。

「「「危ない！！」」」

シリナちゃんとラミルちゃんとミラさんが声を上げた。

「オラア！！！」

俺はもう一度殴ろうとした、サルにあの反応ができるようにわざと遅くして。

「はッ！！見えてるぞ！！」

予想道理サルは大剣で防ごうとする。

「関係なえなアアアア！！！！！！」

俺はサルを、大剣と防具を粉碎しながら殴り飛ばした。

次回

レイステイン（ウザイ奴）はどうなった！？

そしてタイトルの意味が次回明らかになるかも？

乞うご期待！

あゝもう一人いるんだ。ふうん、帰ってきてないんだ。……………エエエエ

感想お待ちしています。

あゝもう一人いるんだ。ふうん、帰ってきてないんだ。……………エエエエ

ではご覧ください。

「それにしても、大剣や防具を砕きながら殴るなんて、凄いですね
銀亜さん」

そう言ってシリナちゃんが俺の右隣を歩き始めた。

「そうでもないだろ、実際軽かったし」

そうなのだ。

あのサルを殴るとき、やけに人体が軽く感じた。

やっぱりこの体って、チートだな。

「あのー、銀亜殿？アヤツはハンターでは軽い分類とはいえ、体重
80キロはありますぞ？」

そうそうアイツ身長高くて、ちょっとがっしりした体型だった。

「ん？モンスターより軽いだろ？」

「それはそうですけど」「ため息」

なんだなんだ二人して、ため息をはくと幸せが逃げるぞ？

「じ、じゃあ引継ぎ受注の依頼成功の申請をするわね」

よろしく願いします、ミラさん。

「まずはギルドカードを渡してください」

「はい、どうぞ」

そう言ってギルドカードを確認するミラさん。

「はい、SSランクですねー。え？SS？」

えっ、固まったよミラさん。

「もしもーし、起きてるー？」

やばいマジでリアクションがない。

そうこうしていると。

「はっ！ここは？」

おお！気が付いたか。

「ミラさん、依頼成功の申請してください！」

少し強めに言う。

「へ？ああ、うん、わかった。少し待ってて」

10分後

「ごめんごめんお待たせ」

そう言っミラさんが戻ってきた。

「結構時間かかったんですね」

シリナちゃんがミラさんに言った。

「いやね、疑ってたわけじゃないんだけど、本物かどうかを調べたの」

あ、そうゆうこと。

「でも凄いわね、SSランクなんて」

「そうですかね」

そこいら辺ホント基準わかんない。

「あつ！そうそう。ティノルちゃんがね、火山に行っただけで帰ってこないのよ！」

ティノルって誰！？と思った人、シリナちゃんたちのチームのもう一人です。

「えっ、何しにいったんですか！？」

身を乗り出すシリナちゃん。

「うんとね、確か、周辺の村にいるアプトノスがね、少し怯えてるって言うか、変なのよ。それにその付近のモンスターがあまり居なくなってるね、その調査に行ってると思うけど」

ん！？何だと！？それじゃあそこには“アイツ”がいるのか、少し……いや、かなりまずいな。

「ミラさんその場所、詳しく教えてください」

次回

火山に住む帝王と異世界から来たハンターとの戦いが始まる……！！

楽勝で終わるのか………それとも

乞つご期待!!!!

あゝもう一人いるんだ。ふうん、帰ってきてないんだ。……………エエエ

次に何が来るか、分かりますよね？

下手な複線でスイマセン。

それと、銀亜に戦わせたいモンスターなど有りましたらどうぞ感想まで。

感想待ってます。

炎の炎帝・主人公の新たな力

―――銀亜目線―――

「ミラさんその場所、詳しく教えてください」

アイツが居るんだったら、ティノルが危ないからな。

「え？ええ良いけど特別よ？」

「はい」

「じゃあ話すわね。行ったのは8日前、リオレウス・リオレイアの番が来る5日前ね。行ったのはテオルネ火山。大昔にテオ・テスカトルとナナ・テスカトリが交尾したと言われてるわ。ちなみにテオルネ火山までは3日掛かるわ」

.....ありえねえよ大当たりかよ、なんか景品出せ。

「いいよー」

え？

「ドサア・・・・・・・・・・・・・・・・」

「銀亜さん！！？」

「銀亜殿！！」

「銀亜君！！？」

「どうした！？」

「銀亜さんが急に倒れてしまって」

「何じゃと！？とりあえず部屋に連れてけ」

「は、はい！..」

「.....ん？.....」

真っ白な世界だ。

どっかで見た気がするんだが、何処だったかな。

「お久しぶりく、げんきだったかい？」

あ、あなたは。

「め、め、め、め、め、め、」

「め？」

「女神ii」

「はい」

何で女神が居んの、もう死んだの？俺って。

早すぎんだろ。

「いや違うよ」

おお、心を読むか、凄いな。

女神様は、

(全部キレイと書いてあります)

(全部ステキと書いてあります)

97

「え／／／／／そんなこと／／／／／言われても／／／／／
／／／うう／／／／／／／／／／／」 「顔真っ赤」

「どうしたんですか？」

「分かった！嘘でしょ、嘘言っただね！」 「顔真っ赤」

「いや、心読めば分かるじゃないですか」

心を読めば、結構本心だって分かるはずなんだけどな。

「アナタが心を乱すから聞こえないの！」 「顔真っ赤」

あ、そうなの。

「じゃあ、言おうかね」

俺は息を吸う。

「本心ですよ。もし貴女以外に好きな人ができても、向こうは一夫

多妻でも一妻多夫でも良いですから」

「欲しいものは何でも手に入れるの?」「顔真っ赤」

「僕は欲しいものは手に入れる主義なんですよ、最低なことにね」

そう言つと女神様は顔を真っ赤にして言つた。

「と、とりあえず此処に呼んだ訳は、あなたに付けたい能力があるの！／＼／＼／＼／」

あ、顔を背けた。

「何で顔を背けるんですか？こっち向いてくださいよ」

手で女神様の顔を挟み、自分の顔のほうに向ける。

[illegible]

ん？顔真つ赤じゃねえか！どれどれ熱はないかな。

そう思い、自分の額を女神様の額に当てる。

作者【ハイよつと】

よし、じゃあ枕に

作者【あ、おい、ちょっと待て。お前が膝枕しろ】

何を言っているんだ？この作者は。

「何言つてんだよ。女神様がいやがると思うぞ」

そう言う作者がにが虫を千個ぐらい噛んだ顔をした。

作者【この天然ジゴロが「小声」。構わないよ俺が作者言つてんだ、良
いんだよ】

あ、そうか。

作者【じゃ、俺は帰る】

「あ、バイバーイ」

作者は帰っていった。

「さて女神様が起きるまで待つか」

次回

あのジゴロ野郎が、いっぺん地獄を見せてやるつか。

ああ、スイマセンもう一回お願いします。

次回 テイク2

女神様が銀亜を呼んだ理由は何なのか！？

乞うご期待！！

炎の炎帝・主人公の新たな力（後書き）

スイマセン、調子に乗りました。

感想待ってます。

「~~~~~」~~~~~「

あ~~~~落ち着く。

元の世界でもカラオケとか行ってたな、そして延長に延長を重ねて十時間ぐらい歌ったていうのは覚えてる。

その後で喉が大変なことになったけど。

でも歌詞は覚えてるし曲も覚えてるから、この場でピアノかなんか使って弾けって言われても大丈夫だ。

今歌ってんのは向こうで好きだった曲だ。

.....なんか曲作るか。

曲作ったりするのも好きなんだよね。

作った曲を音楽の先生に持って行って驚かれたのも覚えてる。

よし曲作ろう、歌詞付きのやつ。

あ、紙とペンがない。

――数時間経過――

「できた」

やっとできたぜ、曲が。

あー大変だったな、膝の感覚がもうない。

最初正座だったけど、今は胡坐あぐらで座ってる。けどそれでも辛いな。

「う……………う……………う……………う……………」
「うう」

お、起きたか、かれこれ四時間ぐらいかな。

「おはよう。早速で悪いけど、膝からどいて貰えると嬉しいかな」

微笑みながら、膝に頭を乗せている女神様に微笑む。

「え？……………っ……………」

顔を真っ赤にして飛びのく女神様。

「よし。じゃあ本題に入りましょうよ女神様。何で呼んだんですっけ」

そう言って立ち上がる。

「ばきべきやばきやけきよべききよべきや」(主人公の膝の音)

……………ナンモキコエナカタナ。

「そうだったわね。さっきも言った気がするけど、あなたに新たな能力を付けようと思って」「顔真っ赤」

そうなのか、でも今でもチートだしな、色々あった方が良いとは思うけど、やりすぎは良くない。

てか、顔真っ赤だけど大丈夫？

「ねえ女神様、顔真っ赤だけど大丈夫？」

そう言う。

え？何で声に出すのか？神は心の声が聞こえるんじゃないのか？ですか。

何かさっきは聞こえてなかったみたいなので、声に出しました。

「え？ああ、大丈夫
ら膝枕して！！」

いや！大丈夫じゃない！！だから

え、うん良いけど。

作者【下心丸出しだな】

「よいしょと／＼／＼／＼／＼／」 「顔真っ赤」

「それでなんだけど、あなたに付けたい能力って言うのは三つあるの。

まず一つ目、更なる身体能力上昇。古龍と腕力勝負しても勝てるようになるわ。

二つ目は、モンスターを人間になることができるようにする能力。これは文字どおりにモンスターを人間にできる。

三つ目は、龍になれる能力。これも文字どおりに自分の体の一部も

「この三つと私をあ・げ・る」
「精一杯の反撃」

[illegible]

とんでもないことになった主人公、

112

乞つこ期待。

炎の炎帝・主人公の新たな力第二話目（後書き）

二個目です。

感想待ってます。

作者【あのさ、進んでも良いか？】

「「あ、良いですけど」「

作者【あ……そう。じゃ】

「じゃあ作者も言ってることだし、戻すね」
神様

あ、うん、了解。

あ、でも帰るって事は気が戻るってことだよな、だとすると女神様は？

「あ、それなら大丈夫、私も向こうに行くから。ギルドから出たら居るから。でもあんまり早く出ないでね、準備があるから」

あそ。

「じゃあね」

「はっっ！……！！……！！……！！」

何か嬉しいような、大変なような気がする。

「「「わぁ！！びつくりした！！……！！」」」

ん？ああスマン。

「大丈夫ですか？銀亜さん？」

「だいじょうぶですか？銀亜殿？」

「大丈夫なの？銀亜君？」

「大丈夫です!!。心配させてごめんな」

頭を撫でて見る。

何でかって言うと、なんとなく。

「はふうふう／／／／／／／／／／」

作者【あゝあ、やっちゃった】

次回

なんだかんだでパワーアップ！

この調子で古龍なんて楽勝だ！？

乞うご期待

おまけの設定紹介

作者が出没するのは、神様が居た世界・銀亜^{主人公}の頭の中・誰も気が付かないけど日常生活・等。

基本的に銀亜^{主人公}にしか聞こえません。（例外を除く）

なぜか、怒り状態のヒロイン^{銀亜のジゴロ犠牲者}も聞こえているようです。

炎の炎帝・主人公の新たな力第三話目（後書き）

感想待ってます。

古龍って意外と弱いね

――――銀亜視点――――

「さてと、行きますか」

じゃあ、テオルネ火山だっけ？に行くか。

「ちょ！銀亜さん！？何処に行くんですか」

ああ、ラミルちゃん。

「いや火山に行こうかと思って」

まっ、この体なら楽勝だろ。

「え？じゃあ私たちも

」

「いや、来るな」

厳しいようだが相手は古龍だ、万が一にも怪我はさせられない。

「相手は、テオ・テスカトルかなナ・テスカトリどちらか、もしくはどちらも居るかもしれない。怪我をさせたくは無いんだ、ここで待っていてくれ」

二人のことを俺は結構気に入ってるみたいだからな。

「待て。許可無く行くことは許さんぞ」

爺さんそこは解決済みだ。

「俺はSSランクのハンターだ。古龍出現予測警戒発令における警戒区域の探索任務に就く、その権限はある」

そうなのである。

SSランクハンター以上には古龍出現予測警戒発令の権限と、その警戒区域への探索任務をする義務が有る。

ちなみにこれは、現場の判断としてギルドマスターをしのぐ権限である。

もし見つかったらの話だが。

そのため発令から見つかるまでは審議期間となり、発令を進言したハンターが探索任務に付かなくてはならない決まりが有る。

「……………なら仕方ないの。許可する、行つて来い」

「感謝する」

そう言つて俺はベットから起き上がり、横にあつた武器を取る。

「じゃ、行つて来る」

「」「……………行つてらっしゃい」「」「」

「行つて来い」

そうしてギルドを出たとき、何かが突進してきた、っ！いや

「会いたかったよー翔君」

「そうですね、俺ですよ」

そう皆さんご存知、女神様である。

「今は、エルリア・ロスレットね。エルって呼んで」

ん、エルね、覚えた。

「んじゃ行くか」

次回

火山に行くときに主人公の能力がだんだんと分かってくる。

驚く主人公、それを見て笑うエルリア。女神様

さてはて、この珍道中に何か起きたりするのかな？

乞うご期待

古龍って意外と弱いね（後書き）

感想待ってます。

古龍って意外と弱いね第二話（前書き）

今回はこんがらがってきた銀亜の能力をまとめる話になりそうではないです。

さてさて、エルリアと銀亜の珍道中、女神様どうなっていくのか。

『古龍って意外と弱いね第二話』開幕にて御座候。

古龍って意外と弱いね第二話

――――銀亜目線――――

「で、どうなってますか？今の俺の能力は？」

火山へと行く道でエルに聞く。女神様

ちなみにエルもハンターになったらしい。女神様

ハンターランクは俺と同じSSランクで、防具は俺の「銀龍烈将」神死」と対になってる防具で、俺が名前を決めたと言ったら『自分のも決めて欲しい』と言ってきたので、決めておいた。

神姫絶鬼【鬼姫】にしといた。

作者【スイマセン、ホントこんなものしか思いつかないんです】

そして武器は自分で造ったらしい。

これの名前も決めて欲しいと言ってきたので、決めといた。

一つ目は、大剣で真つ白い刀身に黒い線が枝のように走っている剣で、名前を、神帝剣ミソロジイ・イロウシヨンの神話の侵略にした。

詳しく聞いてみると、強力な龍属性がかかっているらしく、抜刀すると弱い飛竜は本能的に近寄ってこないらしい。

そのため何時もは開閉式の鞘に収めてある。

二つ目は、ボウガンだ。

しかし、一見すると俺らの世界にあつた機関銃なんだが……
死ぬ前の世界
……まあいいか。

機能も機関銃と酷似していて、全ての弾丸を連射可能、ゲーム風に言うならこんな感じ。

攻撃力：1600

会心率：100%

リロード：極端に速い

ブレ：なし

防御力：270

速射：全弾×33（反動極小）

というところか。

……人の事言えないけど、凄いな。

……と、名前は、しんしききかんじゅう神式鬼神銃にした。

とまあこんな感じで、エルもハンターになっている訳でございませよ。

そこで俺は思った、『俺って、どん位強いんだろ』と。

なんとなくだが凄く強いことは分かる。

しかし、まあ、何だろうね、正直に言うとおんまり自分の能力について考えた事ないからな、どんな能力だったか忘れた。

そんな訳で能力を付けてくれた人、すなわちエル女神様に話を聞こうと思っただけですよ。

そんな訳でもう一度。

「で、どうなってんですか？今の俺の能力は？」

「んー！ため口でいいよ！でないと怒ってしまいますよ！？」

「何で疑問系……………ま、いいか」

「んん！君の能力についてだっけ？それならこの紙に書いてあるよ」！

と、言つて俺に紙じゃなくて巻物を渡してくるエル。

「んん？どれどれ、え……………」と

一つ、『身体能力』ラージャンと腕相撲して、圧勝ぐらい。
垂直跳びで、500mぐらい。
その他、人類を、いや、動物を！馬鹿にしてんのかと言つぐらいの
スペック。

二つ、『運』まあ宝くじ一等を3回当てられるぐらい。

三つ、『お金』これは、欲しいときに欲しいだけ。

四つ、『ハーレム』ある程度の好感を持っている人に対してその感情をプラスに持っていきやすい能力。

五つ、『技術』戦闘においての技術をできる限り入れて、さらに体

に覚えさせた。

六つ、『道具』道具というより、アイテムボックスに秘密がある。全ての物が99個入ってる、弾は500個。さらに取り出しても無くならない、補充され続ける。

七つ、『擬人化』自分ではなく相手に効果がある能力。

一定以上の力、一定以上の知能、一定以上の好感、本人の承諾、全てがそろうとこの能力を使える。

文字ど通りに人にすることができる。

銀座自分の承認があれば龍の体に戻る。

人になる時、服は着てない。

使うときは、相手の額に手を付けて能力を使おうと思うこと。

ちなみに、常識などは一般的なものに相手の常識を掛け合わせた物。

八つ、『龍化』これは自分に仕える能力。

体の一部もしくは体全体を龍にできる。

外見は西洋龍を思い浮かべて、その胴体をスリムにした外見。ちなみに、防具とその他は戻すと元に戻る。

.....
凄いな。

そして俺は巻物を巻き直した。

「これ貰ってもいいか？」

「ん？良いよ」

一応了承を取り自分のポーチにしまう。

「あ！それでなんだけどさ」

エルが話しかけてきた。

「何だ？」

「あのさ、言っておきたい事があるんだよね」

「だからなんだ？」

「実は翔の寿命がすつつつこい延びた」

「……………どん位？」

「700年ぐらい、竜人族でも長い方、もっと延びるかも。さらに死ぬ寸前まで老化しない」

「……………人間や人にしたモンスター達で好きになった人は？」

「えっと、翔に頼る形で寿命が延びる。翔と同じように」

「……………」

「凄く怖いオーラが出てるよ？」

「……………そう」

「すつつつつごく不機嫌オーラ出てるんだけど？」

「……………ふん」

「ごめんなさい」

[illegible]

「え？」

「別に怒ってないよ」

「よかった」

そんなに怖かったのかなと落ち込んでみる俺。

「で、もう一つあるんだけど」

「まだあるの？」

次はなんだろうな？

ま、何が来ても驚かないと思うけど。

「うん。あのね」

「ああ」

少し間が空き

「もし、一人だけ死んだ人をモンスターハンターこっちの世界に能力付きで連れてくる
ことができるとしたら誰にする？」

こっつ言われた。

「は？」

次回

この言葉に銀亜はどう反応するのか？

誰を呼ぶのか？

乞つご期待

古龍って意外と弱いね第二話（後書き）

感想待ってます。

古龍って意外と弱いね第三話（前書き）

さて、前話にて語られたことに対しての銀亜の返答はいかに!!

なんだかんだで進んでいきます、この話！

『古龍って意外と弱いね第三話』開幕にて御座候。

古龍って意外と弱いね第三話

――――銀亜視点――――

「え？」

い、今なんて言った？

生き返らせるだと？

そう言ったのか？

「あのね、私の神の力を使いきって最後に一人だけ、一人だけこっちに能力付きで蘇らせる事ができるんだよ」

それは、俺にとってありがたい事だが。

「大丈夫なのか？」

何が？と言われそんな質問だが、今の俺の混乱した脳みそではこの質問が限界だったし、いろんな意味を含んでいる質問だった。

「ん？ああ、輪廻の輪とかなら大丈夫だよ。私にも何ら問題はないよ」

ああ、そうか。

「で、誰でもいいのか？」

言った後でダメとか言われても恥ずかしいからな。

「別に良いよ？ご先祖様だって良いし、何なら徳川家康でも良いよ？」

別に徳川家康にはしないけど。

だったらあいつにするか。

「じゃあ、そいつに生き返らせても良いか聞くとかできる？」

「ん！オツケーだよ！！」

そう言ったとたん意識が無くなった。

「また此処……………か」

何時ものように真っ白な世界にいた。

「で？誰にするの？」

おっと、そうだったな。

「じゃあ生き返させるのは俺の親友、きんせん こくら金閃黒螺で頼む」

『きんせん こくら金閃黒螺』

俺の親友で、2年前に生まれつき持っていた病気で死んだ。

あいつの家は剣道や柔道や空手などの武術に秀でた家だった。

黒螺は中でも天才でしかも頭も良かった。
でも俺には勝てなかったけどな。

同姓が言うのもどうかと思うがイケメンで、ファンクラブとかあった気がする。

まあ、一言で言えば『超人』『天才』そんな奴であった。

そんな奴と俺がなぜ親友になったかは実は覚えてない。
そういう物だと思うからな。

とまあ、金閃 黒螺の紹介でした。

「了解!!」

エルがそう言うと、閃光が走った。

「っ!!!!」

急いで目を腕でかばう。

そして恐る恐る目を開ける。

そこには

「黒螺！」

俺の親友が居た。

「やあ、聞いたよモンスターハンターの世界に行っただって。また僕と暴れるかい？」

死んだときよりも身長が伸びた、俺の親友が居た

「ああ、そうだな。暴れるか！」

元気そうな顔で

「そうだね」

凄く良い笑顔をしていた。

「じゃあ、どんな能力にするか決めてくれる？」

エルが言ってきた。

さてどんなものにするかな。

「それについてはもう決めてる」

黒螺が言う。

「へー、じゃあ言って」

「翔と同じ能力」

「え？」

「だから、翔と同じ能力を頂戴」

「う、うん。じゃあ防具とか武器は？」

「防具は、黒をベースに金で模様が書いてある鎧で、動きやすさを

優先してくれ」

「うん、オッケー」

「武器は、太刀。全部の属性を入れてくれ」

「うん、じゃあこんなかんじでいい？」

そう言うと黒螺の体に鎧が着せられていて、目の前には真っ黒い鞘に収められた剣が在った。

「ふっふん」

剣を鞘から引き抜くとそこに在ったのは金の剣だった。

「へっ」

綺麗でありながら圧倒的な存在感があった。

キラキラしているのではなく、威圧しているかのような光沢。触れれば全てが切れるのではないかという様な太刀だった。

「名前は、『閃光神劍黒火具螺せんこうしんけん くろかぐらにしよう」

満足げにうなずく黒螺。

………何か気に入らない気がする。

あ！そういえば。

俺だけオリジナルの武器貰ってない。

「翔君も武器作るから要望とかある？」

ナイスタイミングだね。

「じゃあ、俺も太刀で。龍属性を付けてくれ」

「オーケー。こんなんで良いかい？」

目の前に武器が現れた。

「よつと」

鞘は先のほうが白色で手元のほうは黒色だった。

中間は灰色。

これが本当の灰色なのかというように、混沌としているのではなく混ざり合っていた。

「っ！？」

剣を抜いてみると、一気に気温が下がったかのように鳥肌が立った。

そこに在ったのは、『白銀』その一言に尽きる剣だった。

普通の剣のような『鉄』の色ではなく。

作り物の作られた『銀』でもなく。

『白銀』

圧倒的な威圧感を出していた。

「これ、やりすぎじゃない？」

空間を埋め尽くすがごとき威圧感に思わず聞いてしまった。

「ん〜？ちょっと強すぎる気もするけど、良いんじゃない？」

ま、良いか。

「名前は、りゅうげきしんきれんてい龍撃神鬼煉帝だ」

その時、剣が一瞬光った気がした。

「?？」

どうだったか考えていると。

「もう、帰るよ〜〜!」

と、呼ばれた。

「よいしょっと」

立ち上がり、エルと黒螺の方に行く。

「じゃあ、帰るよ?」

「ああ」

ん? 黒螺はどうなるんだ?

「ちよつと」

「

追伸

黒螺は普通に目の前に居ました。

SSリンクだそうです。

次回

さてさて、親友も加わったこの一行の珍道中。

いつになったら付くことやら。

それもこれもこれからのお話。

乞うご期待

古龍って意外と弱いね第三話（後書き）

感想待ってます。

古龍つて意外と弱いね第四話（前書き）

まだまだ火山には着きません。

『古龍つて意外と弱いね第四話』 開幕にて御座候。

古龍って意外と弱いね第四話

――――銀亜視点――――

「おい、黒螺―」

黒螺を呼ぶ。

しかし黒螺は怪訝な顔をした。

「黒螺じゃ無くて『コクラ』。アクセントと字が違う」

「そんなのどうでもいいじゃん」

「いや、良くないね。この世界に着たんだ、漢字読みだと言いにくい事があるかもしれないだろ」

「でも、この世界に来て会った人は話せてたぞ？」

そう言うとはエルが話してきた。

「うん、それは君の『幸運』の能力のおかげだね」

「あつ、そうなんだ」

いやーしかし強いなこの体は。

凄い遠くまで見える。

「しかし、竜車の運転できたんだな、エル」

今俺らが乗っている竜車はエルが運転している。

俺はまったく運転できない。

「ん〜、まあね」

いやーホント凄いな。

「.....」

「.....」

「.....」

..... 会話がねえ。

まったくない。

全然ない。

ヒマ

ヒマ

ヒマ

ヒマ

ヒマ

ヒマ

ヒマ

ヒマ

ヒマ

ヒマ

皆さんヒマは良い事だと言っけどそれは違う。

何故なら！！

娯楽用品等は何も無く！

寝るにしてもまだ早い！

会話をしても持って二分！

周りは何もない草原！

モンスターでも居ないかな？と思っても俺らの剣に怖じ気づいてしまい、小型から中型までは近付かない！

大型の飛竜は餌もないので来ないし！

と言うより此処は一応人の通る道だ、来るわけがない！

と、言う訳で……………ヒマです！

本でも持つてきとけば良かった。

..... 剣でも見とくか。

最初のほうにもあったが、色々と変えた事がある。

まず名前。

俺と黒螺はカタカナにした。

そうそうこの世界には、カタカナとひらがなと後は英語に似ている文字がある。

漢字は方言みたいなものだ。

そして武器。

俺らの付けた名前が……………呼びにくい。

凄まじく読みにくく呼びにくい事に気がついた。

そのため、省略した。

「武器」

俺の武器：『りゅうげきしあれんてい龍撃神鬼煉帝』から『シンレン神煉』へ。

コクラの武器：『せんこうしんけん閃光神剣黒火具螺』から『センコク閃黒』へ。

エルの武器：大剣はそのままの名前『ミソロジイ・イロウシヨン』へ。

ボウガンは『しんしきかんじゅう神式鬼神銃』から『シンシキ神式』へ。

「防具」

俺の防具：『銀龍烈将【神死】』から『銀将』へ。

コクラの防具：名前を出してなかったけど『金龍天帥【神死】』から『金帥』へ。

エルの防具：『神姫絶鬼【鬼姫】』から『神姫』へ。

こんなかんじかな。

あ~~~~~~~~~!! ヲム!!!!

次回

主人公を悩ませるヒマ。

もうちょっと続くかも。

頑張れ主人公。

という訳で、次回も

乞うご期待

古龍って意外と弱いね第四話（後書き）

感想待ってます。

古龍つて意外と弱いね第五話（前書き）

果てのない退屈に襲われる主人公。

抜け出す事ができるのか。

『古龍つて意外と弱いね第五話』 始まりと御座候。

古龍って意外と弱いね第五話

――――銀亜視点――――

終わりのない退屈に悩んでいると

「そういえば、俺って龍になれるんだよな」

ふと思った。

「そうだけど何か？」

だったら

「俺が龍になって飛んでいけば良いんじゃないか？」

そう思うわけだ。

なぜなら俺達はほとんど道具が要らない。

それでもボウガンの弾は要るが、持って行けない訳じゃないし。

飛んでいけばこの竜車より遙かに速いと思っんですよ。

「ん？ん？ん？ん？ん？ん？ん？ん？」

おい、エルまさか。

「あゝまあゝゝうゝゝん」

忘れてたわけじゃあないだろう？

「うーん、まあ、忘れてたね」

ふーん、そうか。

「・・・・・・・・・・・・・・・・もっと早く思い出せ。と言っより忘れるなよ」

そう言った俺。

もっと早くいけたかもしれなのに。

こんなので一日使わなかったかもしれなのに。

「ごめんごめん。私とコクラ君は君みたいに龍になれないのよ。他の能力は同じだけど、それだけではどうしても私達にはできなかったの」

あれ？ そうなの？

「まあこの竜車を置いていく訳にもいかないから、次の町までまっ
てね」

了解！ と言う風に手を挙げて寝転がろうとすると。

「もう着くけど」

「なんだよ！ もう着くのかよ！！」

いかんいかん、思わず突っ込みをしてしまった。

「そうだよ。降りる準備してね」

「了解」

「よし。竜車も預けたし、準備も万端。天気は快晴なり」

飛ぶにはいい天気だ。

飛んだ事ないけど。

「じゃ、龍になって。ちなみに龍になりたいってイメージすればいいよ」

了解っと。

その瞬間俺の体が龍になり始めた。

体の色々な所がでかくなっていき、鱗が出てきた。

完全な龍になるのに3秒弱掛かった。

そして

[illegible]

龍になった俺は咆哮を放った。

別に暴走したわけではない。

ちよつと気持ちが高まつてしまっただけだ。

あ。

やべ。

あいつらが居るんだった。

【おーい、生きてるかーい。】

話そうと思ったら、念話みたいなのがあった。

そう思っているよ。

「おいおい、咆哮だけで軽いクレーターができてるじゃないか」

「流石だね。一回目で飛行に適した龍になるなんて」

え？飛行に適した龍？

【飛行に適した龍ってなんだ？後この念話みたいなのもなんだ？】

「まあそれは飛んでる間に話すよ」

【じゃあ行くか。背中に乗れ】

「おう」

「うん」

よし二人とも背中に乗ったな。

【じゃあ行くぜ】

俺は大空へと飛び出した。

次回

火山に着いた主人公達の見たものとは？

乞うご期待

古龍って意外と弱いね第五話（後書き）

感想待ってます。

古龍つて意外と弱いね第六話（前書き）

主人公の能力とはどのようなものなのか。

何処まで強くなるのか。

それでは『古龍つて意外と弱いね第六話』 始まりと御座候。

古龍って意外と弱いね第六話

――――銀亜視点――――

現在大空を飛行中。

かなり速いです。

【で。この念話みたいなものってなんだ？】

先ほどの質問をもう一度聞き直す。

「ああ。これは、翔君の予想どおり“念話”だよ」

へーそうなんだ。

でもなんで念話が必要なんだろう。

会話ならすればいいじゃん。

「おまえの考えている事は大体分かるぞ。何で念話が必要なんだとか考えてるだろ」

おお！何で分かったんだ？

「お前の考えそんな事ぐらい分かるよ」

そうですか。

【で。なんで念話が必要なんだ？もしかして、このままだと喋れないとか？】

思いついたのを言ってみただけなんだが。

「ウン、そのとうり。龍になると咆哮しかできなくなるからね」

当たってた。

【へへへ。じゃあ“飛行に適した形”ってなんだ？】

もう一つ疑問に思っていたものを聞いてみる。

「それは、翔君の龍状態には種類があるんだよ」

ふん。

と言う事は他にも形態があるってことか。

【じゃあ他の形態は何だ？】

そうするとエルは少し考えてから、口を開いた。

「じゃあ念話の技術を応用して、情報をそっちに送るね」

そんな事もできるのか。

「えい！」

よしよし来た来た。

なになに。

1つ目：「攻撃形態」文字どおり攻撃に優れた形態。

そのため飛行など、あまり他の事には向かない。

攻撃全般に特化している。
いくつかの種類がある。

近距離攻撃形態・近距離攻撃に優れている。

足や顎の力が強くなっている。

遠距離攻撃形態・ブレスや咆哮、距離をつめる事に優れている。

この状態になると三つ首になる。

それによる混乱などは無いようにしてある。

瞬発力・撃てるブレスの種類・咆哮の音量な

どが上がる。

「防御形態」文字どおり防御に優れている形態。

鱗の硬さなどが変化する。

「特殊形態」文字どおり特殊な能力が特化される形態。

飛行形態・長距離や高速の飛行に適した形態。

奇襲形態・気配を消したり一撃必殺に適した形態。

「絶龍形態」 他を絶する力を得られる。
副作用として凄く疲れる。

「備考」 これらの形態は複合する事がある程度できる。
ちなみに龍の形態だと他の飛竜が惚れ易い。

【なんて言っか……………凄いな】

あきれたと言ってもいい。

「まあ……そうだよね」

「まあ……な」

今日分かった事。

オレハ、チートデス。

次回

空を飛んでいると………

何か^が来た。

乞^うご期待

古龍って意外と弱いね第六話（後書き）

感想待ってます。

古龍つて意外と弱いね第七話 (前書き)

空の彼方より来るものとは。

主人公達の運命や如何に。

『古龍つて意外と弱いね第七話』 始まりと御座候。

古龍って意外と弱いね第七話。

――――銀亜視点――――

ん？何かがこっちに来ている。

何だ？あれ。

【何だ？あれ】

背中に乗っている二人に聞いてみる。

「あれって何？」

え？

【あれだよ！あれ！！】

俺は指を刺す。

「何も見えないぞ？」

そんな訳ない！……………はず、なんだけどな。

【そうかな~~~~???】

確かに見えたんだけど？。

ん？んん？？んん？？？むむむむ？？？？

「まあ。この状態だと色んな感覚が研ぎ澄まされてるからね。鳥が何かを感じたんじゃない？」

う—————ん？？？？？

今でも見えているって言うか来てるんだけどな~~~~？

【うむむむむむむむむむむ~~~~ん？？？】

何か違うような？

って、何が違うんでしょうね？

知らんわー！てね。

「でも……………確かにおかしいね。鳥なら来ないだろうし……………」

まあ。龍の近くに飛ぼうなんて思わないだろうし。

「飛竜なら警戒したほうが良いかもね。空だし」

空だと人間は力が入らないからな。

お！ハッキリ見えてきた。

ん？あれ？

【あれ？何か違うぞ？】

何が違うんだ？

「何が違うの？」

えつとおー！。

【体つきなのかな？感覚なのかな？いやよく分かんないけど】

何か

威圧感？

「体つき？感覚？つまり鳥じゃないってこと？」

【ナナ・テスカトリだ！！！！】

次回

現れたナナ・テスカトリ！

主人公達の運命や如何に！！

乞_うご期待

古龍って意外と弱いね第七話。（後書き）

お読みいただいてる方、ありがとうございます!!

感想待ってます。

空中での戦闘。それでも…………やはり（前書き）

ナナ・テスカトリとの遭遇。

さて主人公はどうなるか。

『空中での戦闘。それでも…………やはり』始まりにて御座候。

空中での戦闘。それでも……………やはり

――――銀亜視点――――

先ほど見つけたナナ・テスカトリはかなり接近していた。

【何なんだよ！こんな所で古龍ですか！？そうなんですか！？】

何で――――！！？

何なんだよ！？

「はいはい落ち着く！落ち着く！」

はいはいはいはいはいはいはいはいはいはい。

お――！！ち――！！つ――！！い――！！た――！！

と、
言いたい！！

「さあ！降ろせ！今すぐに！！」

はいはいはいはいはいはいは
すゝゝゝゝい!!!

わ
か
り
ま
し
た
――――！！
(泣)

【ちくせう！！もう嫌や！！】

悲しみのあまり、何かが混ざってしまったろうが！

「ドオオオオオオオオオオ」

【早く降りろお！！括弧、涙！括弧閉じ】

悲しみのあまり、変な事言ってしまっただろうが……！！

「頑張って来い！」
「笑顔」

「頑張ってね!!」
「笑顔」

ち、ち、ち、ち、ち

【ちツツくしょおおおおお——！！！】

「ドオオオオオオオオオオ」

俺は心の涙を流し、ナナ・テスカトリへと向かう。

【ふ、戻ってきたか。逃げ出したのかと

今！！必殺のおおおお！！！！

【ハイパードラゴン鬼イイイイイイイイイイイイ苦!!!】

勢いを付けたままで、キックを繰り出す。

おー！吹っ飛んだ吹っ飛んだ。

h?

何か念話みたいなのが来たぞ？

ま・さ・か・ね~~~~。

お！地面に激突したな！

近付いてみるか……………

【く……………うつ……………あはあ……………】

あるえ？

【おーい。大丈夫かー？】

一応ね、一応。

【うふう……………はうん……………はあはあ】

え？え？

何か念話がおかしくなってるぞ？

何故か若干気持ち良さげだし。

ま・さ・か〜。

【オイ！！オーイ！！！！】

こいつ……………まさか。

【はひい！！】

マゾか？

【お前！俺に蹴られたときどう思った！？】
ストレートでごめんなさい。

でもこれしか思いつかないんだ！許してくれ！！

【はいっ！？えつとお……………そのお……………】

【まあ……………幸福感と言いますか……………はい】
間違いないね。

どMだ。

【何なんだか……………な】

何だかね……………ナナ・テスカトリの凜々しい顔って言うか、
厳しい顔でそんな事言われてもね。

【あの……………ちょっと良いですか？】

ナナ・テスカトリが上半身を起こして俺に聞いてきた。

【ん？ああ。なんだ？】

何なんでしょうね？

できれば、あんまり驚かない事して欲しい。

【良ければなんですけど……………えっと……………】

言いよどんでるな。

そんなに言いにくい事か？

【ああ】

【私と

】

【初めての交尾してくれませんか？】

.....は？

次回

突然の告白に主人公はどうする？

ちなみに、主人公がナナ・テスカトリと遭遇してまだ二時間です。

乞うご期待

おまけの設定公開

主人公の龍状態はどの形態でも、五感と直感が上がります。

この中でも直感はかなり上がります。

主人公が遠く離れたナナ・テスカトリを見つける事ができたのは、この直感のおかげです。

空中での戦闘。それでも.....やはり（後書き）

感想待ってます。

何でこうなった……………自業自得か？（前書き）

ナナ・テスカトリに告白（？）されてしまった主人公。

さてはてどうなる事やら。

『何でこうなった……………自業自得か？』 始まりと御座候。

何でこつなつた……………自業自得か？

――――銀亜視点――――

聞き間違いだと思ひたくなる言葉。

皆さん聞いたことありますか？

俺はまさに今、言われた所です。

【は？……………何て言つた？】

“交尾”と言つたか？

【え？ですから交尾をしてください】

もう嫌だ。

今日は不幸すぎる。

飛んでたらナナ・テスカトリに会うし。

仲間は俺を見捨てて降りるし。
(言いがかり)

ナナ・テスカトリはどMだし。

告白まがいの事をされるし。

何故今日だけなんだ！

何故俺なんだ！

誰か答えろ！！

【何故だ！】

!!】

咆哮に念話を混ぜて叫ぶ。

〔ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオ〕

全力の咆哮は周りの地面にクレーターを作りながら周囲に伝わる。

近くにあった岩は振動で粉々になり。

崖も振動で崩れ、土砂は咆哮に弾かれ周囲に降り注ぎ。

もちろんナナ・テスカトリにも命中して、吹っ飛んでいった。

火山活動かどうかは分からないがマグマが噴出し、それも咆哮に弾かれ周囲に降り注ぐ。

マグマの中に居たであろうヴォルガノスが飛び上がって。

遠くの崖に在つたらしいイーオスの巢が崩壊し、イーオス達がヴオルガノスと共に吹き飛ぶ。

空に在つた雲が凄い勢いで消滅していき。

様子見で来てたらしいグラビモスの番が仲良^{つがい}く空に飛んで行つて。

超上空に居たりオレウスが墜落。

よく見たら砕かれて吹っ飛んだ岩の内の一つはバルザモスで。

近くにあった物の大体は、粉碎されるか吹っ飛ばされるか。

え？何の地獄絵図？と言う状態。

一言だけ言おう。

【やりすぎた！】

大変だ！地形が変わった！

俺が立っている所が塔のようになってる。

周りはまるで地獄。

【あはははははは……………どうしようかな】

とりあえずアイツ^{どM}を探るか。

この時主人公が作った地形は後に『龍神の神域』とされ。ハンター達は此処を通るときには、無事に帰れるようにと祈るようになった。

その事を主人公が知ったとき。

「あゝ…………あれ……………ね」

と。遠い目をしたのであった。

次回

主人公の黒歴史が出来ただけで終わってしまった今回。

次回はどんな進展があるのか！

乞うご期待！！

何でこうなった……………自業自得か？（後書き）

感想待ってます。

災い転じて福となつたのかな？（前書き）

主人公の力による副作用で何かが起きる。

『災い転じて福となつたのかな？』 始まりと御座候。

災い転じて福となったのかな？

――――銀亜視点――――

ヤバイ……………

これはヤバイ。

何がヤバイのかって？

先ほどから腹が減って居るんですよ。

ありえない位には。

【腹くく減ったくくくくく】

何なのこの空腹感は。

先ほどの咆哮のあとあたりから、腹が減り始めた。

「ぐぎゅるるるるるるる」

「じゃあ……………無いかも」

まだ腹減ってるよ、ホントなんでかなあ？

そうすると、俺を起こしてくれたであろう“女性”はこう言ってきた。

「あ、こんがり肉だけは持ってますよ」

「え！？本当に!？」

「わあ！は、はい。持ってます」

思わず大声を上げるほどには嬉しかった。

そのせいで彼女がビクリしていたが。

やったなあ！凄い嬉しい！！

「ありがとう!」

「はい!では、どつぞ」

笑顔で渡してくれたこんがり肉は凄まじく美味しかった。

そつーそれは、十秒足らずで完食するほどに！！

「あの」

と、ある事をお願いするために声をかける。

「はい！何ですか？」

そして俺は言い放つ。

「もう一個くれませんか？」

と、何とも失礼なことを言ってしまった。

そうすると彼女は微笑んで。

「はい、良いですよ」

と、言ってくださったのだ。

俺は凄まじく感動した。

そして彼女の手をつかみ近くに寄って、こう言った。

「本当にありがとう」

腹が減って、判断能力と思考能力がかなり少なくなってしまうていた俺は、自分の能力の事など考えてはいなかった。

そう

「は、はい！／／／／／」

ハーレム能力と言う能力の事を、その時は気が付いていなかった。

さらに、そんな事とも知らない俺は何気なく彼女の名前を聞いてみた。

すると

「ティノル・ペイニードです／／／／」

俺が探していた人だった。

何でやねん。

作者【銀亜が何故火山に来たのか忘れてしまった人は10話・11話をご覧ください】

次回

目的を見つけた主人公はどうなるのか!!

そう言えばコクラとエルはどうなっているのだろうか？

乞うご期待!!

災い転じて福となつたのかな？（後書き）

遅くなつてしまい申し訳ありません。

感想待っています。

これは一体、災いなのか？福なのか？（前書き）

自分の能力によって引き起こした現象が、

災いなのか、福なのか、

『これは一体、災いなのか？福なのか？』 始まりと御座候。

これは一体、災いなのか？福なのか？

――――銀亜視点――――

え？

ティノル・ペイニード？

マジ
本気で？

「え？ティノル・ペイニードさん？」

意味の分からない質問をした俺。

もちろん意味の分からなかったであろうティノルさん（ちゃん？）は首を少し横に倒した。

「はい？私の名前、変ですか？ああ、敬語じゃなくていいですよ」
そう言うわけではないんですが……

とりあえずは目の前に居るティノル・ペイニードちゃんが、俺の探

していたティノル・ペイニードちゃんで合っているのか、一応は確認をとるべきだと思うので聞いてみる。

「あの……………ラミル・シンラートって知っていますか？じゃ無くて、知ってる？」

敬語でなくていいと言われていたのを思い出し、敬語を直す。

そうすると、ティノルちゃんは目を見開き驚いていた。

「何で知っているんですか！？」

少し大きくなった声で聞いてきた。

隠す事ではないので、正直に話す。

「本当は俺が此処に来たのは、君が此処に来たまま帰ってこないって聞いた君とパーティーを組んでいた二人と俺と一緒に居たから君の事を一緒に聞いて居て、古龍が居るかもしれないと思って此処に着たんだよ」

一気に此処に来た理由を話す俺。

そうするとティノルちゃんは不思議そうな顔をして、こう聞いてきた。

「何で貴方は二人と一緒にいたんですか？」

そこでふと気が付いた事があった。

俺、名乗ってなかった。

「ああ。君が町を出発した後に二人の村の近くにリオレイアとリオレウスが来たんだ。それを二人が倒そうと思っただけで、返り討ちに遭^あつて傷ついた所で俺の家に来たんだ。後、俺の名前はギンア・シヨウだ“シヨウ”もしくは“ギンア”と読んでくれ。ちなみにギンアの方が苗字だ」

とりあえず自己紹介もしておいた。

そうするとティノルちゃんは何か分かったような顔をして、一度額^{うなず}いてからこう言った。

「では貴方がリオレイアとリオレウスを狩って下さったんですね、ありがとうございます。何か報酬を差し上げたいのですが、あいにく貧乏でございまして」

と言った。

まあ。もう報酬は貰ってるから良いのだが。

と、言おうとしたのだが、先にティノルちゃんが先にこう言った。

「ですので……私で……よかつたら……あの……貰って
」

「ちょっと待ったあああ！もう貰ってるから！大！丈！夫！
」

顔を赤くして何を言おうとしてるのかな！この子は！

この先を言わせてはマズイ！と、俺の本能が言っていたので叫んで
しまったが、何とかその先を言うのは止めさせる事ができた。

「あつ、そうなんですか？」

台詞を見る限り落ち着いて見えるが、そんな事はない。

顔は真っ赤だ。

「そうそう！大丈夫！大丈夫！」

そんな事言っている俺も顔が熱い。

おそらくは真っ赤だろう。

そんな事を考える前に、何故帰らなかったのかを一応聞いてみたそ
うすると。

「テオ・テスカトルが居たんです」

と言われた。

予想どうりだ。

そう言えばと彼女の防具を何気なく見てみた。

ジンオウシリーズでした。

二人と実力が離れすぎてないか？

そう思うのは俺だけなのだろうか。

何でパーティーを組んでいたのか聞いてみるか。

………あれ？この人が居たら俺がリオ夫妻を狩ら無くても良かった事になるのか………

ふと思いました。

次回

彼女がジンオウガを倒せた理由とは何なのか！？

忘れられてる人がいる気もする。

乞うご期待！！

これは一体、災いなのか？福なのか？（後書き）

質問や登場させたいモンスターなどありましたら感想まで。

感想待ってます。

彼女の正体と自分の能力の言い訳作り（前書き）

さてさて前話で彼女の装備がジンオウシリーズだと言うことはお話ししました。

このお話はその理由と、主人公の能力を誰かに見られたときの言い訳が出てきます。

彼女の秘密と能力の言い訳は、同じようなもの？

『彼女の正体と自分の言い訳作り』 始まりと御座候。

彼女の正体と自分の能力の言い訳作り

――――銀亜視点――――

彼女の防具はジンオウシリーズだった。

彼女の防具を作るのに、狩る必要があるモンスターの名前は。

『ジンオウガ』

ゲームの中ではかなりてこずらされた記憶がある。

まあ、序盤のほうだけではあるが。

しかし、このティノルちゃんが何故狩ることができたのか？

言っでは悪いが彼女は線が細い。

とてもではないが、ジンオウガを倒せるとは思えない。

そう思った俺は彼女に聞いてみることにした。

「という訳で、何でジンオウガを狩れたのかな？」

と聞いてみた。

もちろん突然に。

「何が、と言うわけなんですか？」

おっと、声に出してしまっていたか。

「いや、そこは良いよ。俺が聞きたいのは何でジンオウガを狩れたのか？と言うことだ。失礼だとは思っているが、君にそんな力があるとは思えない」

と補足も付けて、もう一度聞いてみた。

そう言うとき、ティノルちゃんは心の底から不思議そうな顔をした。

「それは私が竜人族だからですけど。何でそんなことを聞くんですか？」

竜人族？あの、村長とかやって居た？あの？

しかし、どういうことだ？

ジンオウガを狩ると、竜人族なのは関係ない気がするんだが。

「ごめん。俺って竜人族が何なのか、よく分からないんだけど」

俺の知識だと、やたらと寿命が長いのと耳が長い事ぐらいしか覚えていないのだが。

そうすると彼女はまたまた不思議そうな顔になり。

「ふむ、まあいいです。私達竜人族は二つの種類に分かれています」
へへそんなんだ。

と俺は首を縦に振る。

「まず耳が長いほう、こちらは比較的に同属、もしくは人をまとめるのが得意です。そのために必要なこと、たとえば頭が良いとか、見た目が良いとか。そんなことが特徴です」

ふむふむ、こっちが俺の知識にある竜人族だな。

「そして私達のような耳が短いほう、こちらは比較的に個人で動くのが得意です。そのために必要なこと、体が丈夫とか、体が大きいとか、力が強いとか」

ふむふむ、ティノルちゃんはこっちか。

「この二つで共通して言えるのが、寿命が長いこと、数が少ないこと、などがあります」

ふーん、そうなのか。

ん？そう言えば耳が長い事と桁が違ふこと以外俺と同じなような気がする。

いや。気がするだけでなく、本当にそうだ！

ん！？良い事思いついた。

「ん？それは故郷で聞いたのと同じだな」

もちろん此処からはでっち上げだ。

「え？そうですか？」

そんなこととは知らないティノルちゃん。

俺の能力を見られても大丈夫なようにね。

「うん。昔は同属だったけど、遥かな昔決別したって」

ティノルちゃんの表情が不思議そうな顔に変わっていく。

此処からは、100%嘘話だ。

「確か。俺らの部族は人に関わるのを嫌がって、少数ながらも他の竜人たちと決別して山奥で生きていたんだ」

もちろん嘘。

いつか本当のことを話すつもりだが。

「そのために他の竜人とは違って、同属と交わり続けて本来の遺伝子や力が継承されているんだ」

そう言うティノルちゃんは不思議そうな顔をさらに深めた。

「その力って、たとえば何ですか？」

と聞いてきた。

その言葉は俺が待っていたものだった。

「たとえば、君の知っている竜人族の長所を合わせたものをさらに強化したものだったり、竜と話せたりかな、もちろん話せるのは古龍クラスの頭の良さが無いといけないけどね」

そう、これこそ俺が考えた嘘話！

『俺は遥か昔に今の竜人族と決別した者だ』

と言う“設定”である。

無理が多少有るが問題ない。

その証拠にティノルちゃんは納得したような顔になった。

「そうなんですか！凄いですね！」

何が凄いのやら分かんが。

次回

主人公はテオ・テスカトルと遭遇する！

だけでなく、激突する！

勝敗は決まっているように見えるが、何かが乱入！！

乞うご期待！！！！

彼女の正体と自分の能力の言い訳作り（後書き）

感想・質問・登場させたいモンスター・等々ありましたら感想まで
待ってます。

人(?)によっては、外見と性格で想像していたより、強いことがある。(前書

前回の次回予告で言ったように、奴と会います。

しかし、色々と起きます。

『人(?)によっては、外見と性格で想像していたより、強いことがある。』

始まりと御座候。

人（？）によっては、外見と性格で想像していたより、強いことがある。

――――銀亜視点――――

「グルルル」

はい。俺が出してるわけじゃないですよ、この声。

もちろんティノルちゃんでもない。

【俺の縄張りで何する気だ！？】

はい。テオ・テスカトルです。

睨まれています。

警戒してます。

気が立ってます。

やっぱりあの咆哮はまずかったかな？

「ギンアさん」

ティノルちゃんが震えながらこちらを見てくる。

涙目で。

……………あの竜、殺すか。

「オイ！そのうるさいトカゲ！」

と一応挑発のようなものをする。

すると、プライドのようなものが高いらしいテオ・テスカトルは、目に見えるほど怒っていた。

翼が震えていたのが見えただけだが。

【貴様ア！！この高貴にして最強の存在である私に向かって！！下等なトカゲと呼びおって！！許さん！！！！】

傍から聞くと、咆哮をあげているだけだが、俺にとってはこう聞こえているのであった。

とりあえず、もっと挑発しておく。

「なーにーが！下等だよ！お前も同じようなもんだろー！！」

思っているかどうかは別としてとりあえず挑発しておく。

怒れば判断力が鈍るとかあるかもしれない。

【ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ……！言わせて置けば調子に乗りおつて……！この高貴で寛容な私でも、もう我慢ならん……！】

……思ったより怒った。

やりすぎたか？

【死ね！！】

いきなり突進してきた。

一応は速いと言える速度で、恐怖で身がすくんだティノルちゃんには避けられそうではない。

そのため、ティノルちゃんを抱き上げて逃げる。

そう、所謂いわゆる“お姫様抱っこ”である。

しかし、これは下心では無い。

これが一番運びやすく、落ちにくいのだ。

.....なので、ブーイングと戻るボタンとユーザーページを押

すのは止めてください。

「ごめんね〜」

もちろん全速力。

町でラミルちゃん達を運んだ速度だ。

なので、もちろん。

「きゃあああああああああああ」

となるのである。

かと言って降ろすわけにはいかない。

「どうしようかな」

と、テオ・テスカトルに背を向けて考えていると。

【ギヤアアアアアアアアアアアアアア】

と、テオ・テスカトルの悲鳴が聞こえた。

ん?と思い後ろを見ると。

【あれ？此処から、あの方の罵声が聞こえたんだけど……………】

と、テオ・テスカトルを踏みつけながら俺を探す、あのナナ・テスカトリ^Mであつた。

踏まれているテオ・テスカトルは白目になり口から泡を吹いている。

「まあ、一件落着？」

意外と強かった、ナナ・テスカトリであつた。

次回

主人公のあの能力が発動！

「あれ？2人^{……}増えてません？」と言ったのは、町で竜車を預かってくれた人。

そしてあの2人とも合流！

乞うご期待。

人(?)によつては、外見と性格で想像していたより、強いことがある。(後書

感想・質問・登場させたいモンスター・等々ありましたら感想まで。

待ってます。

外見が変わっても分かる事があるらしい。(前書き)

あの2人と合流。

あるらしい

『外見が変わっても分かる事があるらしい』 始まりと御座候。

外見が変わっても分かる事があるらしい。

—————銀亜視点—————

色々と分からない事が起こったので、一度整理してみよう。
え〜と。

ティノルちゃんを探しに来た 上空でナナ・テスカトリに遭遇 コ
クラとエルを降ろす 倒す ナナ・テスカトリがドMである事が分
かる とりあえずこの世の不条理を嘆き（大袈裟）咆哮 地形を変
える お腹が空き気絶 ティノルちゃんに遭遇 テオ・テスカトル
が来る ナナ・テスカトリが来てテオ・テスカトルを倒す 完！

うん。訳がわからない。

どうしてナナ・テスカトリが居るのか、それ以前に強いナナ・テ
スカトリ^M。

見た目に、そして性格によらないな。

流石にこのままではいけないから、声をかける。

「なーに探してるのかな？」

ふざけ過ぎたか。

いや、大丈夫だろう。

【ご主人様！？……………て、人間か…】

うん。凄い落ち込みようだ。

少し足の下の特オ・テスカトルに同情してしまったよ。

ん？何かがおかしい。
あ！

「ご主人様って何だよ！！！」
少し。いや、かなりおかしい事に気が付いた。
俺が叫ぶとナナ・テスカトルは体をビクツと震わせ。

【ゴメンナサイ！ゴメンナサイ！この駄目な私にどうかお仕置きを
！】
いやそれ、おかしいだろ。

なんとも言えない感情に体に乗っ取られた俺は、体を震わせるナナ・
テスカトリに向かって走り出し、力を一気に解放させて、叫びなが
らナナ・テスカトリを蹴った。

そう

「色々とおかしいだろうがああああああああああ
と言いなから。」

俺の超ハイスペックな攻撃を食らったナナ・テスカトリは吹っ飛ん
だ。

幸福感溢れる思念を残して。

そしてナナ・テスカトリの着弾地点には、あの2人がいた。

「おーい！翔君！で、なにコレ！！！」

「ナナ・テスカトリだ！逃げろ！」

しかし、俺の超ハイスペックな蹴りを食らったナナ・テスカトリの弾速は凄まじく、文字どおり弾丸のようなスピードで2人に直撃した。

「あ、ヤッベ」

恐る恐る俺は近付いていく。

ティノルちゃんを連れて。

「おい、生きてるかー？」

するとコクラが瓦礫の中から出て来た。

コクラは俺のところまで来た。

「殺！す！気！か！？」

と聞いてきた。

もちろんそんなつもりなど小指の先の甘皮程も無い俺はそれを否定する。

「そんなわけ無いだろ！」

文字では必死そうだが、現実だとにやけ顔だ。
何故なら。

「ホントかよ！？」

そんな事を言う彼の頭に花びらが載っていたからだ。

普通なら笑わないが、彼の真剣な表情がウケを狙っている様で笑えたのだ。

「あの。頭に付いてますよ」

ティノルちゃんに言われた初めて気が付いたようだ。

慌てて取った後、俺に詰め寄るコクラ。

しかし、俺の関心は最早そこには無かった。

そう俺の関心は

「翔君？そこに直れ。イマスグニ」

どす黒いオーラと共に現れた、エルであった。

いやー、汗が止まらないね。

死ぬかも。

「えっと、エルさん？」

戸惑いでいつぱいな声をあげる俺。

ティノルちゃんはアワアワしている。

「正座！シロ！」

どす黒い瘴気を纏い魔神的な存在になっているエルは、元々神にもかかわらず神を辞めたのかと聞きたくなるくらいの怒気と殺気に満ち溢れていた。

「あの、正座ですか？」

俺はあまりの怖さで敬語になってしまった。

………笑った人、覚えておきなよ？夜道で後ろに気配が在った時は……ね。

まあ俺も見ている側だったら、笑ってたかもしれないけど。

「ハヤクシナサイ」

最早あれ、人型をした悪魔だよあれは！

え？チートが何言ってたんだ！って？

いや。もうあれは俺を完全に超えてるよ。

ん？大剣を掴んだぞ。

「シナイノ？スルヨネ正座」

うん。大剣が持ち上げられたぞ。

しないと斬る、そう言っているようだった。

「申し訳ございません。今すぐいたします！」

あまり慣れていない正座をする。

何故かコクラとティノルちゃんも一緒にだ。

しかしエルには何か不機嫌になり。

「オマエモ」

と言った。

お前もって言われても、もう誰もいない……いや居るな。

【わ、私ですか！？】

そうナナ・テスカトリである。

そしてこの念話は聞こえていないであろうエルはこちらを向いた。
通訳をしるということであろう。

「わ、私ですか！？。だそうです」

そうするとエルはナナ・テスカトリを睨み付けて。

「シナイノ？」

怖いね。

しかも黒いオーラがナナ・テスカトリのほうに向かっている。

【は、はいはいはいはい】

世にも珍しい『古龍の正座』である。

どういう姿をしているかは、ご想像にお任せしよう。

そしてこの後、1時間ほど説教をされた時だった。

「アナタ達はどうして」

こう言われながら俺はエルの後ろで攻撃しようとしているテオ・テ^{自殺}
スカトル^{希望者}を見ていた。

ヤツはこう吼えた。

【好機！】

しかしこの状況は好機でもなんでもない。

ヤツはただ単に悪魔の前に焼肉のたれでも付けて、私を食べてくだ
さいと言っている様なものだ。

やつはそれに気付かず、突進していく。

【死いねええええええええええ】

俺らは動かない。

いや、動けない。

何故なら、目の前にエル^{悪魔}が居るからだ。

そのエルはテオ・テスカトルに右手を向けて。

「黙れ」

そのまま掴んだ。

そのまま、拳を握り締めて。

「キエロ」

殴り飛ばした。

ああ。俺もあれできるかな？

そんな事を考える事で現実逃避を果たした俺だったが、エルがこちらを向く事でその幻想から引き戻される。

その後6時間ほど説教された俺だった。

次回

ナナ・テスカトリにあの力が発動する。

乞うご期待。

外見が変わっても分かる事があるらしい。(後書き)

感想・質問・登場させたいモンスター・等々ありましたら感想まで。

待ってます。

さあ！家に帰ろう。え？まだ？（前書き）

家に帰るお話です。

『さあ！家に帰ろう。え？まだ？』乞うご期待。

さあ！家に帰ろう。え？まだ？

――――銀亜視点――――

「あゝ長かった」
説教は終わった。

俺達は立ち上がるうとした。
そうすると俺達の、もう少し言えば説教で正座していた俺達の膝からこんな音が聞こえた。

ゴキヤベキヨゴキオガキキヨベキヨカペキヤキヨ

そして俺以外の皆は

「『ギキヤー――』」
奇声を挙げていた。
まあナナ・テスカトリは叫んだように見えるが。

やはりあの膝から迫り来るこの世の物とは思えないほどの奇妙な感覚！さらにそれに追い討ちをかける激痛！さらに膝からの音！

……やはり耐えられなかったか。
誰だよツ！？

え？俺だ？
分かってるって、ちよつとしたネタだよ。

ん？違う？膝が大丈夫なのか？

ああ、大丈夫だよ

慣れてるから。

何で慣れてるのは知らないけど。

とりあえず電池がきれたかの様に何の殺気も出してないエルに近付こうとする。

何故か目の前にナナ・テスカトリが居るが。

ああ、足が痛いのか。

仕方ない、避けて通るか。

………おい。なんで俺の動いたほうに来てるんだよ！
仕方ない、もう一度避けて通るか。

………何でまた来てるんだよ！
もう良いや、こうして欲しかったんだろ。

俺はそう思いナナ・テスカトリの上に行く。
そっだ重さだけ龍とかできるかな。
よっと。

ベキヤメキヤベキコキヨクヤベキ

エルのもとに向かう俺。
そして声をかける。

「落ち着いたか？すまなかったな、もうちょっと注意を払っとけば良かった」

もちろん後ろは無視。

「うん！私もごめんね！」

機嫌は直ったようだね。

良かったよ、また説教がなくて。

「それはそうとさ、もう帰ろうぜ。ティノルちゃんは見つけたし、テオ・テスカトルは居なくなったし、ナナ・テスカトリはあんなのだし」

ナナ・テスカトリはもう復活している。

何故か俺の後ろでソワソワしている。

「そうだね！帰ろうか！」

うん、それが良い

【ちょっと待ってください！捨てないでください！連れて行ってください！ご主人さまあ！】

いや、連れて行けないでしょ。

でも離れない！くっ付いてる！

「無理！無理！無理！俺は人！お前は古龍！無理なの！」

何とかあきらめる様に言う。

【じゃあご主人様がココに居てください！お願いしますう！】

無理だよ！ああ！もう！離れるお！！！！

これ何か考えないと、こいつ離れないぞ！

てか、泣き付くな！その体で！

ん？その体で？

そうか！あれを使えばいいのか。

「よし、良いだろう。その代わり！人間になってもらう」

これでアイツはあきらめるだろう。

そう思っていると、予想外な行動にでた。

【良いです！何でも良いです！！！】

………なんだかんだ言っても、こいつの事気に入っているんだろうな。

俺、今……こいつの事連れて行こうと思ったよ。

もういつか！

連れて行こう！

「じゃ、やるぜ」

ナナ・テスカトリに手をのせる。

そして、思いつき

「おらあああああああああ」

地面に顔をたたき付けた。

俺の本能がこうしろと言っていたのだ。

しかし、成功したようでよかった。

「えっと、成功ですか？」

と聞いた事があるが、俺やエル、コクラ、ティノルちゃんではない人間の声がしたのだ。

そういつも聞いていた、あの念話が。

そして俺は自分の防具に付いている布を投げながら、こう言った。

「ナナ・テスカトリって長いから、今日からお前は“ナナ”な。そして布を羽織れ」

ちよつとカッコ付けた。

そして

「「何しとんじゃああああああ」」
蹴られた。

その後説教された。

何でも、一言相談が欲しかったらしい。

ごめんなさいと言いました。

次回

帰ります！

乞うご期待

さあ！家に帰ろう。え？まだ？（後書き）

感想・質問・登場させたいモンスター・等々ありましたら感想まで。

待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0374v/>

モンスターハンター馬鹿が行く異世界はモンスターハンターに似た世界でなければ

2011年12月21日19時53分発行